



真っ直ぐな 道はさみしい

ガレージハイブリット
金子の

第5号

残暑お見舞い申し上げます

～ Sunlight Leaves ～

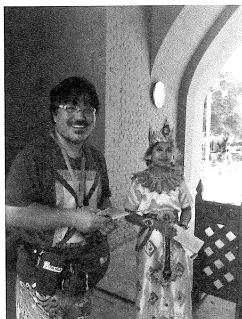
風は爽やかな秋の気配も感じるようになりましたが、今年の夏も暑かったですね。

記憶の中では、小学生の夏休みには盛夏でも気温は30度くらいでした。それが現代は40度程で体温を上まわる気温となり、熱中症で亡くなるかが大勢いる異常な状況になっています。昔は30度を超えると「表で遊んじやだめだよ」なんていわれてました。

もちろん子どもが家に居るわけがなく、近所の神社に遊びに行くのです。常設の鉄棒やブランコを漕ぎ、缶蹴りをして、境内の冷たい井戸水を飲んで、日陰で蝉時雨を浴びながら、見上げた空は今でも忘れられません。神社の境内は町中より確実に涼しかったのです。そこは朝のラジオ体操をしたり、夏祭りには小さな神輿が出たり、そんな夏の思い出となっている「神社」は御朱印を貰うような大きくも有名でない、家から歩いてける集会場と一諸だったりする、コミュニティの文字どおり「寄り所、拠り所」であったりします。そんな小さな神社は、日本全国のどこでも皆さんの身近に在りますよね？

～ Country Scene ～

アジアをバイクで走って「異国」を肌感覚で感じるツーリングがライフワークです。海外ツーリングといえる程ではない、数日間を現地でレンタバイクを足に自由な時を過ごすのです。とてもささやかな「旅」ですが、やはり海外は刺激になります。



日本は海に囲まれていて現実的な海外渡航は航空機利用で、バイク乗りのスピード感を大幅に超える900km/hの移動で、現地に着いて空港の外に出ると別世界

で「ワープ」をして来た感じであり、そこには距離を消化した実感はありません。到着地のまるで違う世界に居るのに「昨日の頃は日本で晩飯食べてたな」という感覚に捉われているのです。そんな、どこか浮遊感に弄ばれていても、バイクで走り出すと途端に身体に感じるエキゾチックな風の香りとともに、時間が動き始める、風景も鮮烈に感じて「自由と解

放]そう、その時の気持ちは「夏休み」の始まりです。

僕がよく行く東南アジアではバイクで走って国境を超えることが簡単です。例えばマレー



シアからシンガポールやタイへ。タイからは橋を歩いてミャンマーへ入国して、ミャンマー側でバイクを借りるなど。憧れの？ ボーダー越えができます。無事にイミグレを後にすると「ホッ」とすると同時に目に飛び込む町の印象が変わります。もちろんナンバーが違ったりですが、電信柱や電線、路面の舗装やライン、標識。走ってる車の種類や利用の仕方や運転の流儀、車の流れの速度などが見事に国境を越えると変わります。

印象もマレーシアからタイに行くとかオーストラリア、シンガポールに渡るとメトロポリタンとしかいえない機能都市の様相になります。先の航空機で一気に時空を超える感覚とは違う地図上の「国境線」を越える実感がバイクの旅では感じられます。ASEAN加盟国内ではバイクの通行や免許はそのままで国境を越えられるのも(カルネや国際ナンバー不要)気楽な「国境越え」を楽しめる要素です。

そして気が付いたのですが、もちろんマレーシアには神社はありませんが、ご町内神社的な小さなモスクというより礼拝所、タイに入ると小さなお寺だったり廟があります。タイの隣



国で過去からは何度も両国間の版図が変わっているミャンマーになると、同じ仏教寺院でもパコダ(仏塔)形式が多くなります。また、島ですがツーリングで楽しいインドネシアのバリ島では、バリヒンズーの寺院となりますが、寺院以外ももう目を向けるところすべてに「神々の在る寺院形式」の建築物です。

ガイドブックに載っている大きなモスクや寺院以外の、宗教施設だけコミュニティの集会所のような、日本の「身近な神社」的な場

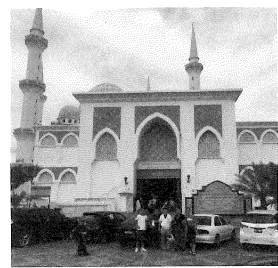
所がご近所にあるのです。これも住宅地や村落を流して走れるバイクならではの発見でしょう。西欧などでも、歩いて行ける距離に地元の教会が在ったりするのでしょうか。国や宗教が違って、人間の生活ってあまり変わらないのかなと思います。宗教は違って人々の生活の隣の隣には「拠り所」はあるのですね。

～ My Summer Vacation ～

マレーシアの友人宅でシャワーを浴び、庭のブーゲンビリアの木を背に夕方の風に吹かれていると夕方のマグリップの「アザーン」(イスラム教の礼拝の時間だよ～という朗々とした案内)が近所のモスクのスピーカーから聞こえてきます。そんな時は甘い南国の風に、なにか溶けていってしまうような気持ちよさです。隣に座るマレーの友人に「プレイ(礼拝)してきていいよ」というと「いや、俺は1回だから気にするな」と「えっ寝る前にだけ？ 朝？」と聞いたら「金曜日の礼拝日(必ずモスクで午後に行なう)だけだから」というので爆笑してしまいました。1週間に1回かよ！ と。三軒隣がモスクなのに……。そういえば長い付き合いだけど、礼拝している姿を見たことないやね。同じオフロードチームの一人はジャングルランの最中でも、時間になると川で禊いで礼拝しているのに。

異国でそんな他愛もない話をしながら、太陽が沈んでいく時の流れに身を任せていると、子どもの頃に田舎で過ごした夏休みのような、永遠に続いてほしいと願う、幸せな時間を得ることができるのです。それは、今の自分にとっての精神的休息時間です。

そして、帰国後に日本の現実に身を置くと「次はいつ「帰郷」しようかな？」と考えてしまうのです。



金子幹典

工業高校から自動車整備業界に就職して工場長を経験して26歳の時にガレージハイブリットを開業して35年、オフロードバイクを販売修理をメインにイベントや海外ツーリング等も運営、最近では整備士養成力を入れています。沖縄とアジアが大好きです。